



Title	中井鼈庵・鼈庵夫人・中井蕉園葬儀記録
Author(s)	山中, 浩之; 小堀, 一正
Citation	懐徳. 1988, 57, p. 103-130
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/90701">https://hdl.handle.net/11094/90701</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

資料報告 中井斎庵・斎庵夫人・中井蕉園葬儀記録

山 中 浩 之  
小 堀 一 正

(三) 中井蕉園葬儀記録

(1) 文明先生墓誌銘

同一冊

本誌第五四号に中井家葬儀記録の内、中井竹山葬儀記録を紹介したが、今回それに引き続いて、中井斎庵・斎庵夫人・中井蕉園の記録を翻刻する。この三人の記録は前回にも記したが、つぎのような文書からなっている。

(一) 中井斎庵葬儀記録

- |                  |    |
|------------------|----|
| (1) 焚香次第（仮題）     | 二枚 |
| (2) 葬列供役人名書付（仮題） | 二枚 |
| (3) 葬儀行列         | 一枚 |
| (4) 墓碑見取図        | 一枚 |
| (5) 三虞朝夕奠品案      | 一枚 |
- 横帳一冊 同一冊

ただし右の内、斎庵葬儀の「三虞朝夕奠品案」および斎庵夫人葬儀の記録下書は割愛させていただく。

中井斎庵は宝暦八年（一七五八）六月一七日、六六歳で歿した。懷徳堂官許化の中心的功労者であり、三宅石庵歿後、享保一五年（一七三〇）末から歿するまでの二八年間、第二代学主兼預り人として懷徳堂の危機衰退期を独力で支え、竹山・履軒の父として次代の隆盛をもたらす基盤をつくった人として知られている（拙稿「中井斎庵」本誌第五五号）。ただし、みられるように斎庵の葬儀記録は簡略なものであり、後のように整備された詳細なものではない。会葬者や香儀の記録は失われた

ものと思われるが、それにしてもこの簡略さは当時の懐徳堂の状況を一定程度反映しているように思う。晩年、五井蘭洲の協力があつたとはいえ、同志の脱退・死歿の中で、一人で運営しなければならなかつた態勢が示されていよう。のちの記録にみられるような町人同志による組織的な葬儀の取仕切りという様相はうかがわれない。

斎庵夫人はや（玻璃あるいは早と表記される）について知られることは少ない。柩に書かれた文によれば、植村六左衛門の娘として正徳二年（一七一二）一〇月一九日に江戸で生れた。植村氏はもと三河の人であつたが、松平主計侯に仕え、その領地播磨佐用郡長谷の地を管理する任にあたつていた。しかし両親とも先に歿し、孤となつたはやが、中井斎庵に嫁したのである。元禄六年（一六九三）生れの斎庵より一九歳年下であった。その婚姻はいつであつたかわからないが、斎庵の年齢からみて、中井家がすでに大坂へ出てきてからであつたと思われる。はやの歿年は天明五年（一七八五）八月二六日で、享年七四歳であつた。斎庵と並んで誓願寺に葬られ、貞範と謚名された。謚名されるのはこのときからであり、おそらく竹山の考え方によつたものと思われる。

この葬儀記録はさきの斎庵のものにくらべて非常に整

備されたあり方を示している。「護喪」「司貨」など同志・門下による役割配備が整えられるとともに、葬埋の方法、行列次第、礼場内の配備や葬礼の受付など、みごとに組織された様子をうかがわせる。学主や預り人の死ではないが、これは中井家というより懐徳堂として葬儀を行なつてゐるのである。物々しいとさえいえるほどである。それは何よりも、斎庵と共に堂を築いてきた功労者としてであり、そして天明二年、第四代学主に就任した竹山の母であり、その就任後、はじめての大きな出来事でもあつたからである。その葬儀の壮大な遂行そのものが懐徳堂および竹山の力を示すという性格を帯びているとみられる。その意味で葬儀記録はそれぞれの時期における懐徳堂の組織や態勢を語る資料でもある。

竹山の長子中井蕉園の死は享和三年（一八〇三）八月四日で、享年三七歳であつた。蕉園の葬儀は斎庵夫人のそれよりもさらに盛大ではあつた。しかし悲痛の趣は深いものがあつた。老竹山は誓願寺へ行くこともなく、懐徳堂内で淡輪元潛（蕉園の前妻の父・医家）につき添われながらその出棺を見守つていた。また履軒の姿も葬儀記録にあらわれない。履軒に親炙した蕉園の死は、履軒にとってもあまりにもつらい事態であったのだろう。

蕉園は学力・詩藻豊かな人として周囲から矚望されていた。彼自身、非常な努力家であったことは、その年齢段階を追っての予定課業科目の計画をみても知られる（中井天生『先哲遺事』上）。田能村竹田は蕉園の詩について「その詩、家法を襲がず、別に機杼を出だす。新秀細潤、喜ぶべきなり」（『竹田荘詩話』）と評した。ただ、塾生の一人で蕉園とも親しく、この葬儀にも参列した角田才二郎（号九華、岡藩士、『近世叢語』の著者）は、同藩の竹田に、蕉園のことを「然ども生平、思を構ずるはなはだ苦し、時ありてあるいは心血を嘔す。殆ど死せんとすること数次なり」（同前）と語ったという。蕉園は自分の病弱な身体を忘れて詩文の構想を練る繊細な人であつたらしい。

竹山は寛政九年、隠居して家督を蕉園に譲り、学校預り人の役を勤めさせていた。また翌一〇年に蕉園は江戸へ行き、尾藤二洲・柴野栗山らとも会って、竹山の後継者としてすでに活動しつつあった。晩年の竹山にとって、蕉園の病身は最も不安なものであった。病状からみて、蕉園の病気は結核であったらしい。竹山は苦しい家計を遺縁りして蕉園を京都へ長期保養に行かせているが、その間、竹山が蕉園に宛てた書簡の数々には、息子を氣遣う父としての竹山の思いがにじみ出ている。しかしその効もなく蕉園は逝った。竹山は「男曾弘（蕉園の諱）を哭す」と題する詩を詠んだ。「天、文運を開かんと欲し、我に授くるに而の才を以てす。年を奪う、何ぞはなはだ早きや。文運竟に開け難し。失声するも私慟するに匪<sup>あらず</sup>。併せて日東のために哀しむ」と。



(仮題)  
「斎庵先生葬儀行列」

仁右衛門

藤

助

下役 下役 下役

世話人周助

挑  
灯

同

若党

草履取

善太

德二  
正良

温故

若党

同  
平

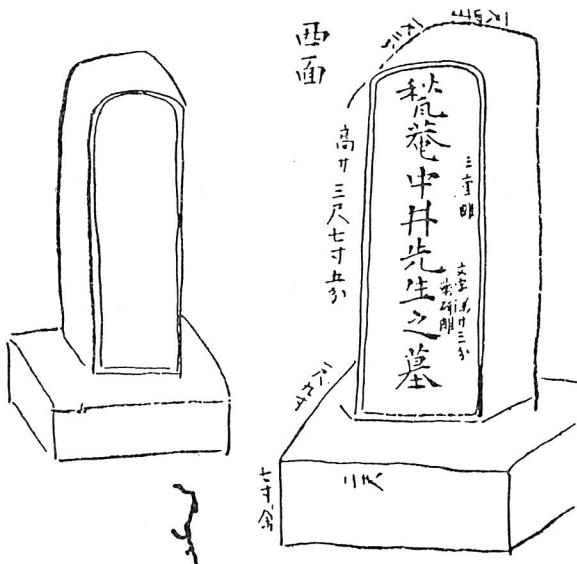
吉兵衛

書生衆  
同志中

同志中供

吉兵衛  
佐右衛門

(別紙一)



(別紙一)

「魏菴先生様御形ヲ以寸法割合之図」

「高九寸位  
幅一尺八寸七步  
台石」

「真石厚九寸五步  
高三尺五寸」

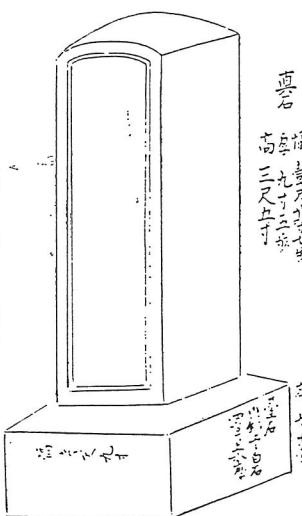
「秋翁先生様御形ヲ以寸法割合之図」

「真石  
幅一尺八寸七步  
高三尺五寸」

「御影上々白石  
五方共上水磨」

「大極上本泉青石ヲ以細工  
御先規之通隨分入念仕立  
四方共極上々本水磨」

「幅一尺九寸」



(表紙)

天明五年乙巳之秋 八月廿六日

貞範姫襄事記

斎庵先生夫人

天明乙巳八月廿六日 戊半剋終焉私謚曰貞範君

護喪

古林正民  
早野永助

加役  
尼崎屋七右衛門

播磨屋九郎兵衛

播磨屋手代專助

桑名恭藏

塾生中

計告

中井氏御母堂御病氣之處養生不相協夜前五ツ時過死去被致候

右御知セ申度如斯御座候以上

学校行司

右相知セ候名当校事藉<sup>(マム)</sup>出ス

廿六日夜四ツ時 京都 白木屋 革島 三木江別飛脚遣ス

翌廿七日朝龍野江相場飛脚ニ書状出ス

同日北条西宮伊丹浜村飛脚江書状出ス

同日早朝<sup>タ</sup>禁酒札はり置

治棺 小之方寸法

高サ武尺九寸 橫壹尺七寸 長サ壹尺九寸

灰隔壀組 帳場札二枚 葬標一枚

大工源右衛門ニ命ス

拵地

丹六事 三木屋 久兵衛

胎範様御碑之左右小兒之墓數々有之北之方ニ定め其小児棺ハ一旦掘出し此度棺之上ノ隅ヘ埋候積りに申遣し見繕はセ其通りに相究申候

穿壙

廿八日

雇四人

廿九日

深サ

堺丈余

三人

手伝 六兵衛

石灰 八斗  
シャリ山荷にて十荷

衷服 鼠上下

白帷子 白帶

右善太 德二 遠藏

七郎

四人分 出入吳服屋布屋清兵衛へ命ス

胎範様之時は白帷子上下とも粧たちすて斬衰之心持ニ

致セ候此度ハ斎衰之心にて其儀無之

送葬具

田邊屋 源  
藏受取

廿九日迄壇外番申付

誓願寺住寺吊悔二來化

素 輓 素 灯 六 張

白服 下女 兩人分

かし物屋 大和屋彦兵衛へ命ス

棺神  
蓋主  
筆者  
古加藤  
林友輔  
正哲

神主早野永助受取

十七日 执物屋平旦微明

沐浴襲斂之具

卷之三

金崎市右衛門カネザキシユエモン四貫島ヨククンジマ命入メイヌ

充  
襄  
百

大歛  
左兵衛

左兵衛  
さ や

۹۴

廿七日之朝參門鎖

虎屋 平右衛門手代  
福島屋 吉兵衛手代

廿九日昼前

墓標  
筆者桑名恭藏

貞節嫗植村氏之墓

筆者 桑名恭蔵

廿八日懇意内なから候下男之分皆かんばん壱刀にて明廿九日  
昼後早はやく参り申候様にと申付候

後早々参り申候様にと申付候

守候

謡璇玑村氏考是經翁第六左衛門世參河人事松平主計君千播之佐用郡長谷次水野氏姫已孤配懿菴中井先生生二子曰積善曰積德孫男三曰曾弘曰曾縉曰菊麻曰孫女一曰刀自以正德二年壬辰十月十九日生于江都天明五年乙巳八月廿六日沒干浪華享年七十有四葬于城南誓願寺塋次嫡性勒儉婦道周備訓子有方撫衆有恩而貞正可以為閭範者尤有稱其名云 百五十九字

広屋 德左衛門手代

伊勢屋 藤四郎手代

右之内老人ハ手替り

挟箱 外平男

重硯 帖三冊

かまむしろ  
小遣錢 五百文

床凡十五脚 門前ニ並候 茶店申付  
藏屋敷方 寺方丈ニ而休息  
廿九日斗リ古林門サス

廿九日未上刻  
出棺 但し乗物之内ヘ神主新筆硯墨ふく紗ニ包ミ入置 墓  
標も同断

諸方らかり候下部出棺前食事出し不申相済次第遅速とも  
此方ヘ帰り次第支度被致候様ニ申合候 尤支度之節も禁  
酒

勝手向にて格別心易働候者ハ少々酒にても振舞候哉 是  
ハ到来之酒にて相済候はとなるへし

酒弁当

札

帳場 中井善大

休息所

是ハ茶店之前ニ  
建置候

行列道筋

今橋ヲ堺筋へ南久宝寺町ヲ八丁目寺町へ

誓くわん寺

下役 美濃屋 文助

挑灯 伊勢屋藤四郎男

挑灯 古林益安男

挑灯 尼崎屋七右衛門男

町代 周助 左官 市左衛門

岡田屋 次兵衛

手伝 六兵衛

下役 砂屋 忠兵衛

挑灯 河内屋三郎右衛門男

挑灯 生貞屋清右衛門男

挑灯 淡路屋源右衛門男



手あき 大工 源右衛門  
檜牧屋 藤兵衛  
吉介

傘支配 美濃屋 左兵衛

喪主兄弟 竹杖  
喪主 親戚 墓生  
右之分半肢立 草鞋

胡灯持 看板 脇差  
昇夫

導師寺門前迄出迎候

燒香之列

正章溫宗正順七遠德善  
哲甫秀助民平郎藏次太

礼場寺内

瀬左衛門 恭丈壽弥塾太  
同志生郎伯助藏二太

右燒香白檀壺包三て相濟

温正順七遠德善  
秀民平郎藏二太

留主人

尼崎屋市右衛門

同手代 壱人

尼崎屋七右衛門

手代 壱人

橋屋 忠右衛門

忠兵衛

大坂屋

下男 壱人

帰り

駕籠

善太 神主守護

其外

親戚茶舟一艘

上大和橋江付置

廿九日帰り後雇人江夜食出ス  
尤親類同志別懇之内当夜一所ニ帰り之人同断

上下六七十人

汁 とうふ

たまきな こんにやく

猪口

蓮根

すみそ

平皿

いも セんまい

飛龍子

## 香物

一廿八日廿九日両日之食事両尼崎や播磨屋舛屋米屋長しま古林

數軒より候重之内にて大方相済

一廿七日朝々廿九日夜迄薄粥煮させて表主両人両男食用とす

## 翌日寺江施物遣入目録

## 覺

一方金武百疋

一同武百疋

一銀三匁ツ、六包

一同壹両

一同三匁

一同式匁

一同八匁

一同式匁

一錢式百文

五百文

一銀式両

一錢壹貫五百文

一銀式匁

一武朱一片

一白米七升

導師へ

墓地代

役僧六人

西堂

弟子二人

小僧

御尼へ

墓御経料

御家来

盛物料

長刀挟箱料

乗物挑灯代

御茶料

七々日忌

同

右之通御受納可被下候

九月朔日

誓願寺 御納処

使者

丹六事

兵衛

家来

久 兵衛

八

床几代

錢 老實三百三十五文

外垣外へ

錢百文

右久兵衛持參

九月朔日 会葬礼

袴羽織

田辺屋 源蔵

名札  
中井善太  
町内并ニ近所表向之所

町内

鴻池 善作

倉賀 治左衛門

助松屋 新二郎

加賀屋治右衛門

吉嶺昌三

片山右門

中井善太

名札  
中井遠蔵  
中井遠蔵

名札  
古中林正民

砂村童及  
塩川左司馬  
今村源右衛門  
與田半兵衛  
岡本八左衛門  
由利勘右衛門  
小松原伝右衛門  
浅井喜八郎

泉屋義筌  
道具屋勝兵衛  
野田や吉兵衛  
鴻池藤七  
米屋伊太郎  
天王寺屋伊右衛門  
天王寺屋忠兵衛  
天王寺屋清八  
岩井屋仁右衛門  
玉子屋太兵衛  
才田屋半兵衛

帶刀袴羽織にて 播磨屋 佐兵衛

名札  
中 井 善 太

足守	沼	惣左衛門
松山	遠山	新吾
立野	三沢	延岡
丸山	直左衛門	四屋
津輕	小見山直右衛門	矢覺助
安治	庄左衛門	悦之介
尾張	武佐二郎	八左衛門
姫路	有馬	三股
肥後	菅野	勝之丞
	尚太郎	
杵築	古山	愛助
岡田	鐵藏	
小田原	酒井	良蔵

篠崎	長兵衛
近江屋	休兵衛
加鳴屋	右衛門
泉屋	利兵衛
由比	甚右衛門
近藤	三右衛門
小山	作兵衛
福嶋屋	武兵衛
同	喜兵衛
壺井屋	吉右衛門
多羅尾	元三郎
淡輪	元潛
金屋	七郎右衛門
播磨屋	源兵衛
但し町内ハ当夜源蔵直に相務他所ハ翌日より方角を分ち左兵衛	
両度巡勤以手札申置	
先年之形にて別懇中門下之分礼使省略之	
一百拾六文	豆腐九丁
一七百八十七文	白絹七尺
但し眞目中井ニ御湯巻入用	費用覚

初虞再虞之料理ハ甚混雜故大忠ニ申付拵さす  
一三虞ハ吉林ら料理備へ

一三百六拾文	一六拾六匁	自張乗物 壱丁
一四百六拾文	白綸子ヘリ糸ふサ	
一四百六拾文	但し絞袴入用	
一七十八文	杓	自晒
一武百文	手拭	手おけ
一武百文	但しかどうり買	
一五十文	小遣	下女へ渡ス
一四拾八文	草履	
一四拾八文	挟箱	けづりちゃん
一四拾八文	米	つきらん
一三百五十七文	はし	
右小メ	つぎらん	
一金子壱兩貳朱	同断	壹両ツ、三ツ
一拾貳匁九分	壹両ツ、八ツ	
一武拾四匁	同断	三匁ツ、八ツ
一拾匁	同断	武匁ツ、五ツ
一五百文	盛物代	
一壱貫三百卅五文	帳場茶店	床几代
一四百文	寺男へ遣ス	
一壱貫五百文	のりもの	
一百文	提灯代	
一三百文	寺垣外番へ	
一武百文	会所 周助	
一六百文	町下役兩人へ	
丁ノ番人へ	金一両貳朱	
	銀武百十六匁八分	
	錢八貫七百廿五文	

一拾貰百八拾八文

又助 人足賓

内

壹貰五百文

五百文

六百文

四貫八百文

壹貰七百廿四文

六百六拾四文

四百文

一四匁三分

但し又助子也

一百七拾七匁四分

廿九文

六拾三匁

七匁貳分

六匁五分

拾七匁貳分

拾三匁

廿貳匁五分

拾九匁

同袴二つ

(點紙)

〔但し〕白帷子自布帶風上下四人前にて百貳拾八匁九分也 右之  
大小平均にて 壱人前三拾匁七分ハリ五も 風袴羽織式人前四

拾九匁五分 右老人前にて貳拾匁七分五り

右二口老人前にて五拾壹匁四分七リ五も也」

一拾四文

一五匁

但し座界蓋ハ有合ニテ別ニ不申付  
さし物や 平兵衛

一毫匁

但し神主題名 砥ハ新物 有合 別ニ調不申尤寺へ此分

持参

一拾匁

一貳百五拾文

但し靈座の下敷也

五百文

但し喪中寺参り入用

熊谷笠 二かい

大小々

百九十七匁五分

拾貰九百五十六文

金メ壹兩貳朱

代凡六拾七匁五分

銀メ四百九拾四匁五分

錢メ貳拾貳百六拾壹文

代凡貳百廿壹匁七分

右袴合 入用高

右之内

金壹兩貳朱

代凡六十七匁五分

銀四百八拾四匁貳分毫リ

錢廿弐貫文

代凡弐百弐拾匁

差七百七拾壹匁七分毫リ

播磨屋九郎兵衛より當座取替有之

拾老匁九分九厘ハ九月前節季之内一所ニ拵出しひなり

相済

(表紙)

蕉園先生  
文明先生襄事錄

八月四日  
御奉行所

中井淵藏同居親

中井 淑翁

口上之覺

惣淵藏義病氣之處今曉死去仕候ニ付右死骸取片付如何可仕候哉  
此段奉窺候已上

朝公儀御箋書之覽  
(ヤブレ)  
月番東御奉行所

行司

司貨

司書

長谷川七郎右衛門  
中井 雄右衛門

中川 元吾

岡橋 文助  
中井 要蔵

享和癸亥八月四日 賢上刻終焉私謚曰文明先生

易賁卦象辞文明以止人文也

護喪

加役 藤田 九郎兵衛  
山片 平右衛門  
并河誠輔

六日朝東番所より書状到来

連名

工藤 次郎四郎  
小泉 忠兵衛

## 案文

御用之儀有之間只今若狹守御役所江可被罷出候以上

八月六日

右之受案文

御用之儀御座候付只今可罷出旨奉畏入候以上

八月六日

上之式人連名當

當番所名代使者

中井 漢翁

伊丹之分  
尼崎 河内国分

大津 丹波介  
三木 佐渡守  
大村 彦太郎  
草島 信吉  
山口 平左衛門へ  
相頬社中通達之事

足達 重右衛門  
田中 純治  
板植 中務

善根寺村

北条村

花崎 彦六

足達 重右衛門

古林 章甫

花崎 彦六

治棺 四日朝申付ル其夜来ル 小の方

寸法

高サ 式尺九寸  
長サ 壱尺九寸  
横 壱尺七寸  
厚サ 壱寸五部

灰隔壹組

帳場札 幅四寸  
休息札 幅六寸  
長壹尺五寸

墓標

筆者 早野義三 (次頁参照)

以手紙致啓上候然ハ中井淵藏義兼而之病氣養生不相叶去ル四日  
曉被致死去候此段為御知申度如斯御座候以上

八月

学校行司

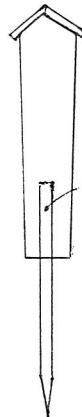
右相(衍カ)為相知候名當

京都之分 太田 穎庵

乘興 (次頁参照)

介庵中井先生墓

アリサシ



拵地

田中純治

三木屋久兵衛

貞静様御碑之左傍隙地小兒棺差障候ニ付一旦壇出し此度棺ノ上之隅へ埋候積リニ申遣し見繕ハセ其通りニ相究メ申候事

穿墳

寺之手伝へ申付ル

七日之朝壇堀リカケル

深サ棺上壺丈旧例出入手伝六兵衛へ申付ル此度相改メ寺へ相

頼ム甚妙ナリ

石灰八斗

砂利山荷ニ而十荷

都合砂利十三荷

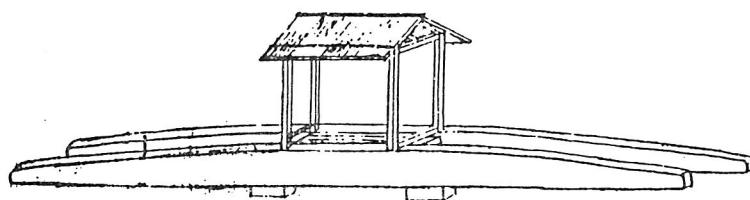
石灰壺石壺斗五升

右砂利石灰之類寺ニ而申付ル

喪服  
吉林出入大和屋孫兵衛へ申付ル

鼠上下  
一

中井塾庵・塾庵夫人・中井舊園葬儀記録





帳場者誓願寺門前北之方溝之上ニ足なしの床几式脚わたし  
絵筵ヲ布

硯  
墨  
華牋

一面  
一握

武三葉

但シ印章以下五品平素机上之具故斂之

棺蓋 執筆 早野義三

介庵先生柩

此中式人  
手明キ

尼崎屋 七右衛門  
福嶋屋 吉兵衛  
宇和島屋庄左衛門  
伊勢屋 藤次郎  
播磨屋 九郎兵衛  
宇和島屋庄左衛門  
手代代郎  
手代代郎  
手代代郎  
手代代郎

先生諱曾弘字伯毅姓中井氏称淵藏介庵其号又号蕉園其先播人父  
竹山夫子母草島氏以明和丁亥十二月十八日先生於大阪府岸先生  
性明敏而溫易手不积卷詞藻宏麗而敏捷古今鮮比夫子之老也授庠  
務于先生未數歲罹疾中愈而復劇以享和癸亥八月四日卒年三拾有  
七娶淡輪氏生一男而俱亡娶川北氏生男不育有一女在襁先生之倫  
十余皆早世一弟独存曰曾縮先生疾病撫治庠事葬于誓願寺私謚曰  
文明

五日四ツ時誓願寺病氣ニ付名代組合慶恩院來ル為吊悔棺前  
ニ而梵音至極穩也

銘旌

古製異様ニ付不用之新用縫吊墓標ヲつゝむ帰ルニ  
枚原紙ヲ以ス

正面粉書  
筆者 早野義三

文明先生中井君伯毅柩

八日四ツ時帳場之人數遣ス

休息所実相寺

応接者 升平手代式人

筆者 播磨屋九郎兵衛  
長谷川七郎兵衛  
長谷川喜右衛門  
并ニ小童

中井齋庵・齋庵夫人・中井蕉園葬儀記録

行列道筋

今橋ヲ なにわはしヲ 南久宝寺町ヲ 上本町八丁め寺町

誓願寺

行列奉行

中井 要  
藏

田辺屋仁右衛門

文四郎

履壱 八

長野友太郎

佐藤要藏

石野重藏

大和屋七兵衛

履治兵衛

侍  
麻上下股立  
わらち

半股立草履

先 払

羽織一刀

同 伊右衛門

梁田八百吉

角田才二郎

中原卓治郎

同

銘 旌  
旗  
股立  
わらち

興夫 同

看板  
わらち

同 挟箱持 麗長七

若党

よし村屋  
股立  
わらち  
刀

若党

麗安兵衛  
股立  
わらち

若党

麗安兵衛  
股立  
わらち

草履取

石平

以下礼服

若党

麻上下

若党

麻上下

興 若党  
はりまや  
助 股立  
わらち  
帶刀

草履取 千八

七 郎 竹杖  
眼わらち

若党

麗安兵衛  
股立  
わらち

草履取

石平

以下礼服

若党

麻上下

若党

麻上下

中井雄右衛門  
若党 屋内  
草履取

平兵衛

永嶋 肇

若党

右病氣二付不參

井河誠輔

若党 同

吉林温秀

若党

草履取

川北陽三郎 格式供

荒木伝治代慶治 格式共

金籠

尼市僕

塾生供 同壱人

雇老人

同志

田中純治 格式供

以上

空襲

喪主 神主護シ帰ル

道師門前迄出迎  
燒香之列

同志

金崎 市右衛門

早 古並 荒 淡 川 淡 中 井 七 郎  
野 林 河 木 輪 北 輪 島 新五郎  
義 秀 温誠 伝 鹿 元 策 雄右衛門  
三 藏 秀輔 治 三郎 肇

慶病  
治相勤付

幼少ニ付代

病氣ニ付不臨  
上京ニ付不臨

藤田忠右衛門死去ニ付  
今助相勤付  
前日死  
不及代  
去ニ付  
不臨

之列懇意ニ付同志  
之列懇意ニ付同志  
二加フ

藤田 九郎兵衛  
山片 平右衛門

永 井 藤四郎

鈴 木 治兵衛

長谷川七郎右衛門

播磨屋 兵 助

金崎 七右衛門

山 中 和二郎

岡 橋 丈 助

池 上 新 助

右兩人留主役相頼出門之前燒香

塾生

中原 卓二郎  
石野 充 藏  
角田 才二郎  
佐藤 要 藏

寺へ遣スもの

米 七升

田中純治塾生之初ニ燒香可致處護喪之通ニ而不及之

已上 右燒香白檀七郎兼而懷中之分

ニ而相済

右之外諸門人衆勝手次第燒香

此度袴屋仁右衛門格別之義ニ付同志之初

燒香相讓候得共承知無之

礼場寺内

七 小一 郎 郎

雄右衛門

留主人

岡 池 上 新 助

橋 丈 助

西 島 立 敬

橋 為五郎

古林僕 老人

福吉僕 老人

雇飯燒 老人

淡輪元潛老自分心得ニ而留主中

老先生接伴被致候事

かうのもの にしめ 此式品福吉ら被贈

右之品朝四ツ時より岡橋之僕ニ為持遣し寺ニ而飯を焼す  
是ハ埋葬ニかゝり候親戚懇意及其家来のミニ用ゆ惣世話

話田辺屋仁右衛門

袴屋 仁右衛門

千草屋 熊藏

此兩人先へ寺へ行諸寺見縉相頼

茶船老舗 上大和橋へ繫置キ親戚及童子帰乗ル

帰後夜食可出人数

親類同志別懇之内当夜老所ニ帰リ候人

帳場之人

応接之人 但シ休息所

借り人

雇ヒ人

凡百人

料理献立

汁 とうふ

菜

猪口 酢あへすいき

ハすね

平

ひりやうす  
いも

上式十人前  
松茸

松茸

但し 平 猪口  
并河氏より八十人前 仕出し

少々不足 三付内 三而足ス

酒 百合四升別ニ尼小ニ而七升買

旧例禁酒ニ御座候へ共此度雇人供人膳中ニ而壱

献出ス

翌九日寺へ施物遣ス

使者田辺仁右衛門 僕千八

一金武百疋

御導師様

墓地料

御役僧様

御同宿様

墓御経料

一金毛兩

墓地料

御役僧様

御同宿様

墓御経料

一銀三匁 四封

御役僧様

御小僧様

御同宿様

墓御経料

一銀武匁

御役僧様

御小僧様

御同宿様

墓御経料

一銀三匁

御役僧様

御小僧様

御同宿様

墓御経料

一銀武匁

御役僧様

御小僧様

御同宿様

墓御経料

一銀三匁

御役僧様

御小僧様

御同宿様

墓御経料

一銀三両

御台所 茶料

実相寺様 御台所

南鎌壺片

一南鎌壺片

御台所 茶料

実相寺様 御台所

一齊米七升

御台所 茶料

実相寺様 御台所

一鳥目五百文

御台所 茶料

実相寺様 御台所

一鳥目武百文

御台所 茶料

実相寺様 御台所

一鳥目武百文

御台所 茶料

実相寺様 御台所

一垣外番へ

一銀壺西  
一鳥目百文

御代僧慶恩院様  
同御供  
御台所老婆

一六貫八百五十九文

但し八百七十七文

六十五文かへ 砂利十三荷

武貫八百五十四文

十八文かへ 石灰壺石壺斗

穴堀日雇

五千升

三百文

右まし

武百九十九文

桶

但し穿横之節 小兒之柩有之ニ付改葬之節入用

武百三十文

手伝

但し改葬之砌之手伝

右之通り御受納可被下候

八月九日

中井七郎

誓願寺御納所

会葬礼 中井七郎名札

十日町内斗り石野充藏相勤

家内

二而整

初虞

八日夜

再虞

十日朝

三虞

十二日朝

古林

古林より料理備

并河

并河より料理備

吉林

吉林より料理備

費用覚

一六百八十匁  
一壺貫五十壺文  
但し七百三文

茶船代  
草履わらぢ

一金壺両三分  
一銀三十九匁式分  
一錢壺貫百文

一壺貫五十五分  
但し土座蓋料  
武百四十八文

わらし 四十五足  
上あみそらり 式足  
そらり 式十足  
大和屋長兵衛

一六貫八百五十九文  
右寺之謝物

葬埋 寺入用

大工

一武十壺匁五分  
但し土座蓋料  
武百四十八文

釘撞  
天満屋基助  
白加賀屋五尺三寸

一四十九匁  
但し式十匁  
三匁五分  
十六匁五分  
壺匁八分  
七匁  
三分

大和屋(ヤブヒ)  
孫兵衛(ヤブヒ)  
上下仕立代  
さらし 壱匁  
白帷子(ヤマシキ) 壱匁  
さらし 壱丈  
自帶仕立代  
袴(ハラマ)

一十九匁三分  
一五匁三分  
一十武匁八分  
一十七文

瀝青  
七星板下之石灰  
好井屋善兵衛  
もよいろ 綱四尺五寸  
京伊丹池田状貢

一三十目九分  
但し十五匁九分  
十五匁  
一武十壺匁五分  
一五貫三百文  
但し四匁三分宛  
三百文宛  
七百文  
四百文

風五郎丸上下  
上下仕立代  
さらし 壱匁  
白帷子(ヤマシキ) 壱匁  
さらし 壱丈  
自帶仕立代  
袴(ハラマ)

一四匁五分  
一武百武十文  
但し四十八文 店走

百四十八文 鳥羽走  
武十文 伊丹池田状貢

一三百四十武文  
一百文  
一銀三匁  
一百文  
一百文  
一百文

さらしも綿 三反  
白木綿 三反  
文四郎 同人  
若党五人  
雇人拾四人  
式十老人髪結代  
飯燒雇老人

一五十五文  
一六十文  
一武百六十文  
一八百文  
一八百文

木具壺  
寺之筒花  
かんばん式ツ かり賃  
並河出入住吉や伊助  
取次三而挟箱片しきり賃  
小遣

一式匁  
五百文  
但し四匁三分宛  
三百文宛  
七百文  
四百文

大和屋(ヤブヒ)  
孫兵衛(ヤブヒ)  
上下仕立代  
さらし 壱匁  
白帷子(ヤマシキ) 壱匁  
さらし 壱丈  
自帶仕立代  
袴(ハラマ)

一五十五文  
一六十文  
一武百六十文  
一八百文  
一八百文

同後之知らせ  
京初之知らせ  
木具壺  
寺之筒花  
かんばん式ツ かり賃  
並河出入住吉や伊助  
取次三而挟箱片しきり賃  
小遣

会所周助  
下役

一式百文

当町髪結

垣外番

一南鎌巻片

文四郎

天満与力衆者岡橋丈助名前ニ而連名回状ヲ以而相知らせ申

候事

一武十五匁五分  
但し病中ら

おさい やとひ

一三匁

さや やとひ

一三匁

たこ 同し

一三匁

きさ 同し

一三匁

そよ 同し

一七匁五分

まさ 同し

一七匁五分  
但し病中ら

平兵衛

一沐浴

一三匁

おれん様お梯様  
寺参り

一瀝青

一四匁

一穿墳

一素興

一公辺届向之義

一充襄

一旧例主人死去之節死去のミニ而相済候へ共此度ハ都次一

一件京都かゝり之義有之ニ付屬續早々親族同志評議之上七

郎八田五郎左衛門毛江龍こし内意申合せ之上□□取斗フ

一訃告

一充襄

一属續後近密之者のミニ病氣大切之趣相触れ其他者公辺向相

濟候後申遣ス

一借り人之事

一但し京都伊丹者官命有之候後死去之知せ葬式日限追

一尼市ら

一僕家人

一岡橋ら

一同式人

一同壇人

## &lt;懷德堂関係研究文献提要(六)&gt;

古林ら 同壱人  
帳場前記ス

応接人前記ス

并河ら 出入之者壱人四日より七日迄

一包金之事

六日升平店ニ而諸包金相願整來ル

一革島新五郎名代事

太田新之丞出阪可有之別ニ不設置處新之丞出阪之上禁中

御用ニ付火構候由ニ而急ニ代人相頼候ヘ共其備なく相済

一并河父子代人之事

相頼候へ共臨表之節故此義なし

一早野之事

死者格別之懇意故行列ニよさし候へ共棺脇ニ引傍ひ被參

一候様相頼

一燒香列説出し

田辺屋仁右衛門相頼

(6)論文・時野谷勝「懷德堂の歴史観」(季刊日本思想史)第二十号、昭和58年)  
本論文は、懷德堂の中興期を代表する中井竹山・履軒の著述を通して、懷德堂の歴史観の特色を考察している。

一、中井竹山の『逸史』

寛政四年(一七九二)の船場・天満の大火灾による懷德堂類焼から寛政八年(一七九六)の懷德堂再興工事竣工までの間、竹山は幕府要路に対して再興の援助を積極的に働きかけている。

その二年後の寛政十年(一七九八)に、竹山が既に成病していた『逸史』を献納せよとの幕府の命が下った。それ以後、寛政十一年五月二十八日に『逸史』を献納するまでの経緯は、竹山の「自序」に明らかであるが、同書中の「進逸史稿」には、「自序」からは看取し得ない『逸史』編述の目的をうかがうことができる。

「自序」によれば、起稿以来五回の推敲を重ね、天明年間(一七八一~一七八八)ようやく完稿し秘藏していたところ、図らずも将軍家に聞え、寛政十年十一月に献納の命が下つたため、急ぎ書きに努め、寛政十一年四月にそれを終え、五月二十八日献納の運びになったという。しかし、「進逸史稿」には、「英主」の「英」の字が、後桃園天皇(在位、明和七年~安永八年)の諱を避けて「英」と闇筆で記されている。とすれば、『逸史』は、幕府が献納の命を下す以前、明和七年(一七七